

魔法の食べ物 〔三稿カ〕

母のくれた食べ物の思い出は、母の記憶と一緒に私には薄い。小学校2年の春に母を亡くしたからである。しかし、母の忘れられない『食べ物』といえは、どうしても一つ思い浮かんでくる。

私は悪さばかりする子どもだった。そのため中学校の教師をしていた父に、日に何発もげんこつをくらった。襖に穴を開けては一発。トタン屋根を這って歩いては一発。隣家の畑からイチゴがなくなったと聞いてまた一発。日に三発は下らなかつたから、一年中着ていた服の袖は涙と鼻水でぐちよぐちよになり、それをお日様で乾かしてテカテカにし、悪友たちとどつちが光っているか競ったものだった。「落ち着きが少ないようです」などと書かれた通信簿をもらった日の父の噴火たるや、正座した私は固まったまま石になった。それでも悪さは収まらない。何よ

り母が逃げ場所だった。

そんな私も時々風邪をひいた。注射も薬も大嫌いだった。当時の粉薬の量は子どもには多かつた。オブラートもすぐのどに詰まった。

「薬は苦えもん<sup>にげ</sup>だ。うだから薬なんだ」

子どもには分からない説教をして、飲まないでいるとまた父のげんこが飛んできた。涙をポロポロこぼしながら父の前で薬を飲まされた。そんなある日の晩に母は私の手を引いて、母屋から離れた納屋へ連れて行った。薄暗い裸電球の下で、不思議そうに私が見上げていると、母の目がキラキラ輝いている。そして、小さな包みの紙片を口に当てて見せた。それから、中の物を口に含んで、

「あつ、甘えー<sup>あめ</sup>?！」

小さく叫んで、ニコニコしている。

「おらもうっ」

私はすぐ母にすがりついた。

母が私にくれたのは、灰色の苦い色が消える

ほど砂糖で真白にしたくすりだった。

母のくれた食べ物<sup>食べ物</sup>の思い出は、母の記憶と一緒に、私には薄い。小学校2年の春に、母を亡くしたからである。母といえ、いつも<sup>エキ</sup>エキしていたことと、毎晩おねじまをしては尻を叩かれて蒲団のわきは立たされたことが、すぐよみがえってくるのだが、母がくれた「の」忘れられない『食物』の思い出は「といえは」、「ごうしても」一つあった「思い浮かんでくる」。

私は悪さばかりする子どもだった。そのため中学校の教師をしていた父に、日に何発ものげんこつをくらった。襖に穴を開けては一発。トタ<sup>ン</sup>屋根を忍者にやりすまして「はって」歩いては一発。隣家の畑のイチゴがなくなったと聞いてまた一発。毎日三発は下らなかつたから、おかげで私の一年中着ていた服の袖は涙と鼻水でべろべろになり、それをお日様で乾かして、テカテカにし、悪友と比べっこしてどちらが光ってい

るか、自慢し合ったものだった。

「落ち着きが少々ないようです」などと通信簿に書かれたのを申した「日には、その」晩の父の噴火たるや、尋常では本がわった。「正座した」私は固まって石は「と」なつた。

それでも悪さは収まらない。甘いものを探し出しては盗み食いをしたり、そあいう私は何より母「だけ」が逃げ場所だった。

「そんな」私も、年に何度か人並みは「時々」風「邪」をひいた。医者は注射をするから「ので」恐くて大嫌い「だった」。しかもまずくて苦い薬を「ごつそりよこす。当時は、粉薬の量が、子どもには多かつた。オブラートはのどに詰まって容易に飲めない。

「薬は苦<sup>にげ</sup>えもんだ。うだから薬だ。そのまま飲<sup>ゆ</sup>」

「父は」子どもの私には訳の分からない説教をして、飲まないでいると、またげんこが飛んで来た。涙をポロポロこぼしながら父の前で薬を

飲まされた。

そんなある日の晩に母が私の手を引いて、母屋から離れた納屋へ連れて行つた。薄暗い裸電球の下で、不思議そうに私が見上げていると、母の目がキラキラ輝いている。そして、小さな包みの紙片を口にあてて見せた。「それから、」中の物を口に含んで

「あつ、甘<sup>あめ</sup>えー?」母がニコニコしている。

「おらも」私はすぐに母にすがりついた。母が私にくれたのは、灰色のにがい色も「が」消えるほど砂糖で真白にしたくすりだった。

魔法の食べ物〔初稿カ〕

母の食物の記憶は、母の記憶と一緒に、私には薄い。小学校2年の春で、母を亡くしたからである。母といえは、いつもニコニコしていたことと、毎晩おねしょをしては、尻を叩かれて蒲団のわきに立たされたことが、すぐよみがえってくるのだが、母がくれた最後の「忘れられない」『食物』の思い出は「が」、ひとつあった。

私は落ち着きなく、悪さばかりする子どもだった。「そのため」中学校の教師をしていた父に、日に何発ものげんこつをくらった。襖に穴を開けては一発。トタン屋根の上を忍者になりすまして歩いては一発。隣家の畑のイチゴがなくなくなった聞いてまた一発。毎日三発は下らなかつた。「から、」おかげで私の一年中着ていた服の袖は涙と鼻でテカテカになり、それをお日様で乾しては、友だち「悪友」と比べついで、どちらが光るか、自慢し合ったものだった。「落ち着き

が少ないようです」などと通信簿に書かれたのを目にした晩の父の噴火たるや、尋常ではなかつた。私は固つて石になつてしまった。

それでも悪さは収まらない。甘いものを探し出しては盗み食いし「をしたり」、そういう私は何より母が逃げ場所だった。

「わいも私も、年に、何度かは風邪をひいた。医者にはわかつた「恐くて大嫌いだつた」。注射をされる。まず、苦い薬を「ごすりよこす。当時は、薬の錠剤など少なく、しかも粉薬の量が、子どもには多かつた。オブラートがはやっていたが、のどにつまつて容易に飲めない。飲まない」と、父のげんこつが飛んでくる。

「薬はにがいもんだ。にがいから薬なんだ。んだから、そのまま飲むんだ」

子どもの私には正体「訳」の分からない説教も、厳令として下された。涙をポロポロこぼしながら父の前で薬を飲まされた。

「こんな、苦いなら、あ「治」らんでもいい、と思

い「願ひ」ながら、涙をポロポロこぼしながら、父の前で薬を飲まされた。

そんなある日「晩」に母が「私の手を引いて」母屋を「から」離れた納屋へ連れて行つた。薄暗い裸電球の下、不思議な「な思ひで」私が見上げていると、母の目がキラキラ輝いて「る」。そして、紙「小さな」包みの紙片を口であてて、中の物を食べてみせた。

「あつ、あまーい?」

母がニコニコしている。

「おらも」

私は「すぐに」母にすがつた。

母が私にくれたもの「食物、の」は、灰色で「の」にがい薬の色さえ「も」わからないほど砂糖で真白にした薬だった。

「私のマザーフード」思ひ出に残る食の体験「エッセイ」公募キャンペーン応募作品（シダックス特別記念企画）グランプリ賞金50万円 SHIDAX主催。農林水産省、朝日新聞社後援 平成17年7月25日～9月26日公募